

【本文】

住み込竹家庭教師

マ房が住む部屋

外をながめやる

（は庭を）

接頭

接頭

霧

存続

（た）

渡殿の戸口の局に見出だせば、ほのうちきりたる朝の露もま

戸口にある局で（外も）見てりまこ

ほんのりと少し霧がかかっている

（道長↑筆者）

打消す

使役す

お供の者を呼びになて

使役す

だ落ちぬに、殿ありかせ給ひて、御隨身召して遣水払はせ給ふ。

尊敬補助

尊

（道長↑筆者）

所存在

断定なり

尊敬す

橋の南なる女郎花のいみじう盛りなるを、一枝折らせ給ひて、

花

（私の）身が思い知られることです

接頭

尊敬

が

（私の）身が思い知られることです

几帳の上よりさし覗かせたまへる御さまの、いと恥づかしげな

朝起きたばかりのソレメクの

尊補

気恥ずかしくなまほ

断定なり

私は

自然

推量

るに、我が朝顔の思ひ知らるれば「これ。遅くてはわるからむ」

女郎花のうた

形

よくないだろう

とおしやまのにかこつて

口実にして

完了

とのたまはするにことつけて、硯のもとに寄りぬ。

尊

女郎花の今をふかりの色を見たばかりに

露がおけへたてする

係助

（私の）身が思い知られることです

女郎花さかりの色を見るからに露の分きける身こそ知らるれ

接頭：原因・理由

存続

（道長は）

「あな、疾」

感動詞 + 形語幹 ↓ 感動表現

今までのあなたを見ると、露がおいてくれない
私の身の衰えが思い知らされます

と微笑みて、硯召し出づ。

尊

あなたも心かけ次第で美しくられますよ

紅葉をもちらす

打消推量

断定

現在推量

白露は分きても置かじ女郎花心からにや色の染むらむ

白露はわけへだて置かじはしまじ

女郎花は（つゆによって）はなく（心がけによって）色が美しく染まるといふのだらうよ

動詞・助動詞（用）
形容詞・形容動詞（語幹）
+ 「け」 → ~のようだ

【読解】

露が花や葉の上に置く
↓色がかわり、紅葉する、沈まる。

■場面設定

時間…… (朝)

季節…… (秋)

【ほのうちきりたる】

【露】

■登場人物

筆者 (紫式部) ……庭の様子を【見出ばす】

自室として【渡殿】の【戸口の局】 【を与えられている。】

殿 (二道長) ……庭を歩いて、お供の人に遣水の掃除をさせる。

橋の南にある【女郎花】 ……【秋の七草】

一枝折って渡す

「これ、逢くとはわろからむ。」

どううまく詠のまか
試してやうう。

局を覗きながら
歌を詠ませる。



(筆者) 歌

女郎花 さかりの色を見るからに

露の分きける身こそ知らるれ

↓ 女郎花の色は美しくまぶかり！

⇄ それに比べて私はあまり美しくはない。

(殿) 「あな、疾。」 ……満足！

返歌

白露は分きても置かじ 女郎花

心からにや色の染むらむ

↓ 女郎花のいかりのようにな美しくあろうとすれば

美しくなれるんだよ。

※女郎花の本意

女性、戯れの恋の相手